

香の磯



東京上磯会
会報
第 2 号

ふるさと考

東京上機会 会長

相馬 正樹



北海道の出身者が作る「東京〇〇会」というふるさと会が八十余りもあり、札幌や旭川、函館のような大都会よりはむしろわれわれ道産子でも聞いたことのない置戸、秩父別などという小さな町のほうがまとまっていて盛大のようだ。

本州のふるさと会を見ると、府県単位のものが多いが、東北、九州などのような府県ほど盛んなのは、ふるさととは遠くにありて思うものだからであろう。それにしても北海道の人たちが特に懐郷の念が強いのは、どうしてだろうと考えてみて、こんな結論に達した。

私はもの心がついてからあのうつつという冬を考えると、木枯らしの吹く秋がもの悲しく、それゆえに春が待ち遠しかった。北国の季節は、冬を抜きにしては考えられない。梅、桃、桜が一斉に花咲く春も、すずらんが咲き誇る初夏も、ポプラの巨木が屹立する秋も、一瞬耳を澄ませば、どこからか寂しくもの悲しい気配が忍び寄ってくる。これはやがて半年間大地を一色にうずめる暗くて長い冬が来ることからもたらされるものに相違ない。

渡辺淳一ふうに言えば、今燃え立つ草木も、その中で鳴き続ける虫も、すべての生命は短く、南の国に住む生き物の半分の命しか与

えられていない。だがこの儚^{はかな}さがあるからこそ、人々は北国に惹かれ、そこを孤独と憂愁を癒す場所として憧れ、愛するのである。道産子のふるさと会が多いわけを、私なりにこのように理解している。

そしてこれが道産子の郷愁の原点になっているとすれば、冬の厳しさのない恵まれた内地の人たちには計り知れないものなのかもしれない。

余談になるが、私は若いときには石川啄木の歌が好きでした。

『はたはたと 黍の葉鳴れる ふるさとの』

軒端なつかし 秋風吹けば』

を口ずさんでその韻に酔っていた。しかし、長ずるにおよんで彼のあさはかな感性を疑い、

『かさかさ と 黍の葉鳴れる ふるさとの』

軒端なつかし 木枯らし吹けば』

と書き換えることにしている。秋風の音を伝えるのは黍の葉だから、晩秋のころは「はたはた」ではなく「かさかさ」という音になる。そしてこのころに吹く風は「やませ」と言われる北風で「木枯らし」である。したがって、これが北海道の晩秋の光景だとすれば、木枯らしが吹いてカサカサという音を立てなければならぬ。啄木は北海道の厳しい晩秋のうら悲しさを実感していないから、単なるゴロ合わせの歌になってしまっている。彼のような天才歌人にして、北海道の身にしみる儚さを理解できなかったのだろうか。

会報の発刊に寄せて

上磯町長

海老澤 順三

東京上磯会の会報発刊に当たり、ひと言お祝いを申し上げます。
昨年、上磯小学校吹奏楽部の皆さんが全国大会出場のため上京した際には、東京上磯会の皆様に一方ならぬご配慮をいただきまことにありがとうございました。吹奏楽部の方々も皆様の応援のもと、心に残るすばらしい演奏会だったと感想を述べておりました。ほんとうにありがとうございました。

長年の懸案であり、町民の待望久しかった上磯町総合文化センター（愛称：かなで〜る）が今年七月にオープンし、地域文化、芸術活動の拠点として、健康で明るく文化の香り漂う地域づくりのため広く活用されることとなりました。「かなで〜る」は一千席の大ホールをメインに三百席の小ホールや各種会議室、図書館、特別展示資料室を備えた複合文化施設で、これらの機能が相互に補完し、有機的なつながりを持つことにより、町民の皆様が生涯にわたって広範に利用できる施設として整備しました。六月には地域に根ざした文化・芸術の振興、発展をみずからの手で作り上げていくため、有志による上磯町かなで〜る協会が設立され、現在八十八名、四団体で構成され、「感動」の共有を求め、コンサートや演劇、文化講演会などを企画しています。皆様も帰郷の際にはぜひ一度お立ち寄りください。

また、十月にはインターネットに上磯町のホームページを開設して、地域の観光、特産品の情報などを発信し、町の特性を広くPR

していきます。現在はまだ制作中のためほんの数ページしかありませんが、アドレスは <http://www.hakodate.or.jp/kamiliso/> です。機会があったらアクセスしてみてください。

最後になりましたが、東京上磯会のますますの発展と皆様のご健勝を祈念し、会報発刊に当たってのあいさつとさせていただきます。



上磯町総合文化センター「かなで〜る」



望郷の年代

山下 勇吉

今年六月末に上磯中学校卒業生名簿が発刊され、送付してきました。第一回昭和二十三年卒業の方から、第四十九回平成八年卒業までの方々の名簿であります。名簿作成に尽力された地元の役員、協力された有志諸氏に対し敬意を表するとともに、他方向という「ズサン」な、「無責任」な役員選考をしたものかと、ことばで言い表せないもの悲しい「むなしさ」を感じた会員は私だけではなく、多くの人々に不信感を与えたのではないだろうか。

九年間も歳月を費やした集大成が見るも無残な、みごとな手抜きを露見する結果になると夢々思うことなく、誠心誠意努力した方々を裏切り、また、同期の仲間をこれほどまでに裏切り、ないがしろにしても心が痛まないのだろうか。中には、親兄弟、姉妹の消息のわからなくなつた人や、地元の同級の人との交流を断っている人もいることで、これはやむをえないことです。役場で調べるとか住んでいた近所の方々に尋ねるなどして方法は幾通りもあります。また、そういうノウハウを生かし足を運び、ほぼ完璧に近い名簿を作成した役員は、仲間を思う、人間性の豊かな社会人として人々から尊敬されていると思います。中学生三年間の生活を共にした仲間を思いやる心はごくむごい教育をした担任の教師、親、兄弟にも多少の責任はないとは言いが、何より本人の心次

第です。

他人に左右されるものではない。「一面倒くさい」、「おつくうだ」という怠慢な心。利己主義な人には仲間を思いやる、故郷を思うという念がないと、この上磯中学卒業生名簿を見ていさらながらつくづく感じた次第であります。

今年には二女の結婚、亡母の法要などで長期間函館におり、上磯町内はもとより、近在の山野、河川に山菜取りや「イワナ」、「ヤマメ」釣りに何十回となく足を運び、自然観察に長時間じっくり浸ってきた。驚くべきことに、わが故郷上磯町の山野、河川の自然破壊が「断トツ」。これほど大きく生態系が変わっているなどと想像もできず。もはや手遅れで十年や二十年では回復不可能と思われれます。

昨年号の創刊号で故郷の自然を紹介しましたが、短期間、昔から知っている場所で集中的に遊び、楽しんでくるため、自然観察の時間が少なく、また、山野草の咲く時期から外れたりして確認できない物も数多かつたことから、自然破壊の進行を見落としたことです。昔のようなすずらんや黒ゆり、おみなえし、鬼ゆり、野あやめなどの群生地は今の上磯では皆無の状態で、ついに発見することができず、残念でなりません。

何が原因かはつきりしていることは、広葉樹林を伐採して、「杉」などの針葉樹の山にしたからです。昔の上磯は杉の林も少なく、また、山の持ち主もよく枝払い、間伐など、山の「手入れ」をした。杉が「金」になるといので、「欲」にかられた人々が、われもわれもと杉を植えたが、枝は燃料、間伐材は丸太、長成して電柱など。需要の多かつたときのこと。今は「手入れ」をすれば出費がかかるから放置状態で、枝ばかりが生い茂り、また、間伐もしないので、陽光が下に届かず、ほかの植物を絶滅に追いやり、雨が降っても保水力がなく、洪水の元凶にもなり、杉花粉を散らし、公害とも言うべき花粉症で人々を苦しめている。また、保水力のない「杉」のために洪水が出るために、河川および海の魚介類にも被害を及ぼしていることを「杉」山の持ち主の方々は自覚し、自然環境

を昔のままに守ってもらいたいものと痛感した次第です。金もうけのために「杉」を植え、金にならなくなったら、また、費用がかかるといって放置する利己主義が、多くの人々に公害、被害を及ぼす結果となり、わが故郷上磯町の自然破壊をしているのである。

序論での中学卒業生名簿作成に関しても、同級生の仲間を思い、まじめに汗を流して奔走した役員に申し訳ないという心持がないのだろうか、特に、すでに大学生となったり就職して上磯町に在住しない平成四年以前の卒業生名簿を、中学校に行ってもらってきた物を丸写しにしている神経が、何人もの役員の「眼」に不自然だと思ふ心がなかったことが残念である。

在郷の方にお願したい。遠く離れ、望郷の念を持っている私たちのために、「山野に自然を」、「河川の魚道を」、そして、海をきれいに守り、また、他人を思いやる心を持った人々の育成に力を合わせてくださいと。

(東京都江戸川区在住)

近くて遠いふるさと

宮崎 紀夫

ふるさとが、あつてないのが東京住まいだ。
生まれた故郷はありながら、その土地の思い出も、お故郷柄も何とはなしに遠い思い出となっている。

十七、八年はふるさとの空気を思う存分吸ったが、仕事の関係で道内各地を転々と十余年、あとの二十余年は東京都とあれば、お故郷も遠きにある気がしきりだ(この間の転勤回数は二十四回)。

時折、ご先祖の墓参りなどで帰省し、昔からなじんだ田舎料理などを前にすると、もうたまらなく胸が熱くなってしまふのだ。

風景だってそうだ。幼いころよく遊んだ川や海や山が、そのまん

まの姿で迎えてくれると、タイムトンネルをスーッと逆行していつて、たちまち少年のころの世界に戻れるのだ。

それはまったく汚れない、キラキラした掛けがえのない一刻でもある。こんなすばらしいことってあるだろうか。

ふるさとというのは、おふくろの懐きたいなものだ。いつも優しく温かく包んでくれる。

ふるさと、それは人間の個々の伝統の地であろう。そんな大事なところだ。

ふるさとよ、永遠に栄えあれだ。

ふるさととは遠きにおいて思うものという。仕事に追われてなかなか思いをはせることができないが、フツと思ひ出す、きょうこのころである。



私の自慢の町：上磯

郷内 繁

ふるさと上磯を離れて四十四年の歳月が流れました。上磯に生まれ、高校卒業までの十八年間を過ごした町、上磯……。自然豊かなそして海の幸、山の幸に恵まれた私自慢の町です。

夏は海へ、家からフンドシ一枚でそのまま海へ、唇が紫色になるまで海へつかり、足で掘って採ったホッキ貝の味、冬は日が暮れるまで滑った坊主山でのスキー、春・秋の山菜採りと、どれもが懐かしく思い出されます。そんな私も、いつのまにか六十歳を過ぎてしまいました。それでも幼いころ同様、アウトドアスポーツが大好きで、ゴルフは今でもかろうじてシングルハンディを維持し、また、今回は家内や子供たちの「年寄りの冷や水にならないように」のこ とばを遮り、スキューバーダイビングに挑戦し、ライセンスを取得しました。早速、八月には海外でのダイビングを楽しもうと思っております。こんな強じんな体をはぐくんできた上磯の自然に感謝しております。

一か月ほど前、実家に所用があり上磯を訪れました。家内といっしょなのは久しぶりのことです。わずかの時間を作り、高校時代の友人夫妻と昔懐かしい大沼公園一周に出かけました。ちょうど夕暮れどきで、観光客も一段落したとみえ人影も少なく、辺り一面静寂と化した中に、夕日に映える駒岳の雄姿を見、そのすばらしさに感激を新たにいたしました。

家内も何度も車を降り、その美しさに感嘆しておりました。

そのあと、私の母校のある元町へと向かいました。もうすつかり日が落ちていました。暗やみで見る母校、校舎は新築され昔の面影はないものの、校門から校舎に至る坂道、校舎の裏山の情景は昔のままでした。そして、眼下に見える元町一帯の光景、特に美しくラ

イトアップされたハリスト教会、緑の木々に囲まれた家並み、どことなくエキゾチックな風情を醸し出し、これらを眺めていると郷愁を覚えずにはいられませんでした。

今回は短時間のドライブでしたが、このように美しい自然美を持つ後背地に囲まれた上磯のすばらしさを家内は始めて認知してくれました（実は家内は東京生まれの東京育ち。でもやっぱりお墓だけは東京に」と主張を譲りません……。もう少し時間をかけての話し合いが必要のようです）。

そんな上磯で幼いころを、あるいは青春時代を過ごした仲間たちが集う「東京上磯会」は、皆それぞれの思い出や、それぞれの持つふるさとへの郷愁を、そして何の飾り気もいらず、あの懐かしい「上磯弁」で語り合える場です。ふだんは冷たい鉄とコンクリートとガラスに囲まれ、どこかよそ行きの態度を強いられるそんな生活を送っている私たちにとって、ふるさと会は心の安らぎと温かさを提供してくれる場所でもあります。そんな東京上磯会のみならずの発展を願う者の一人です。

では、また再会の日を楽しみにしております。

(東京都世田谷区在住)

海の旅人

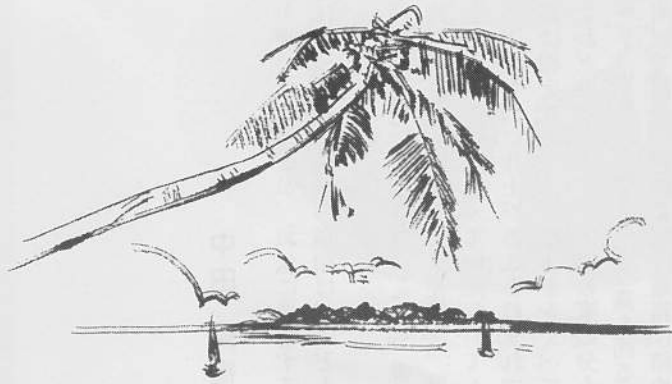
相馬 滋

便りを運ぶ海流

日本列島は海に囲まれ、南からは黒潮（暖流）が北上し、北からは親潮（寒流）が南下してくる。中国、朝鮮半島あるいは南のインドネシア、フィリピンの島々で、風雨に打たれ陸を離れたさまざまなものが、海流に乗って果てしない洋上の旅を続ける。やがてその

ほんの一部が海岸に打ち上げられてわれわれの目に留まる。これらの漂流物はゴミと言われているが、それぞれには違ったルートがある。ハンブル文字の書かれてある浮き拾えば、何を釣る浮きなのか韓国の友人に聞いてみたり、船のアカ出しが漂着していたら、安否を気遣ってニュースを調べたりすることもある。神社のお札が見つかれば、かろうじて見える伊予・竜大社の文字を頼りにその出生を訪ねてみようとも思う。

数年前、九州の離島で手紙の入ったコココーラの瓶を拾った。これは手紙から福岡の小学生が瓶の行方を調べるために投げ込んだものだった。早速拾った日時や場所を書いて知らせたら返事が来て、これが縁で今も文通をしているが、この少年も今は高校生でしょう。島崎藤村の「椰子の実」の歌詞のように、名も知らぬ遠き島より流れ寄った椰子の実に出会うときもある。海水を防ぎ海上の長旅に耐えるような丈夫な殻で保護されている種子は、波に乗って外洋を渡



って遠隔の地に根づくこうとするしただかさを感じさせる。しかし、早い時期に海岸にたどりつけないと発芽しないこともあるので、よい時期に漂着したのを見るとき、「よくやったぞ」とうれしくなり、持ち帰って庭に植えたりすることもある。

拾ったゴミをリサイクル

私が本格的に漂流物を收拾するようになったのは十年ぐらい前からですが、海浜に出かけると珍しいと思われるものをずだ袋に詰め込んでくる。袋の中身はアオイ貝、オウム貝、釣具、漁具、椰子の実、神社のお札、軽石、がん貝、流木などさまざまである。これらのガラクタの一部は少し手を加えたと格好な民芸品に早変わりするものである。これらは待っている愛好者に贈り、また新たな物との出会いを求めて旅に出る。

漂流物に国境はない

世界の国の人口の半数程度は海の沿岸で暮らし、それを潤す海流は生命を育てるとともに漂流物を運び続ける。日本のゴミも遠くハワイ、アメリカ方面に旅をしている。他人から見れば単なる「クズ拾い」でも、私にとっては「何だろう、どこから来たのだろう、いつからここにいるのだろう」などと、この広い海の向こう側にある大自然や民族の生活を想像させて尽きないものがあるのです。そして、そこには予期せぬ出会いがあり、未知の世界への夢をかきかたてるものがあり、さらには地球規模の雄大なロマンとドラマがあるのです。したがって、漂流物とともに海上の道をたどり、彼らの出生地を探し歩くのが私の夢なのです。

ふるさと

中田 真樹子

茂辺地を離れてから何度か帰ってはいしたが、お盆に帰省するのは二十数年ぶりのこと。線香に煙っている墓地の様相は、子どもころを思い出させてくれた。

お盆が近くなると幾日も前から準備に忙しくしていた母。煮しめ、てん(ところてん)、酢の物、おこわ(赤飯)、盆花等々。料理が苦手だったようで、母の煮しめは毎年味が違っていたし、てんに至っては、つるりとのごしのよいものに仕上がることばまれであったような気がする。ただ、庭に据えたストーブにまきをくべて、せいろを何段も重ねて蒸すおこわだけはうまく、よその家の分も蒸していたのを覚えていた。墓参りといえは、親せき中の墓も回るので、水は大きなやかんに、花は両腕で抱え、お供え物は重箱に詰めた。照りつける日差しの中を、流れる汗を手でふきながら墓地まで歩いたものだった。新しい服を着せてもらい、晴れがましい気持ちで遠くから来る叔父や叔母、いとこたちに会うのが楽しみだったお盆。

そして今年、以前は墓地の入口からでも見えていた先祖の墓は、林立する墓石の中に、ひっそりとこけむっていた。今、墓地には水道が引かれて、やかんは手桶に替わり、墓前にはぶどうの葉に替わって、発泡スチロールのトレーにお供え物が載せられていた。道には車が並び、二十数年の間に墓参りもスマート(?)になったものだと思う。

町を歩けばすれ違う人に懐かしさを感じるのだが、尋ねてみるほどの記憶もなく、相手も首をかしげて行き過ぎる。「○○ちゃんじゃないかい?」と呼び止められ、振り向くと中学時代の同級生がいた。互いの近況と昔話を少しと、地元で同窓会を開くときには知らせると約束をして別れた。

三日間の滞在の中で、親類の人たちが運んでくれる地元のものに舌鼓をうち、緑の空気を思い切り吸い、「ひと」に触れて何かがほどこけていくのを感じた。そして、浜から眺める函館山は、昔のままの姿だったことになぜかほっとした。ふるさととは遠きにありて思うもの―であり、ときには帰って「力」を頂いてくるのも故郷、の思いを強くしたのである。

(旧姓 小野寺 茂辺地出身)

六十年ぶりの再会

…トラピスト修道院余話…

相馬 正樹

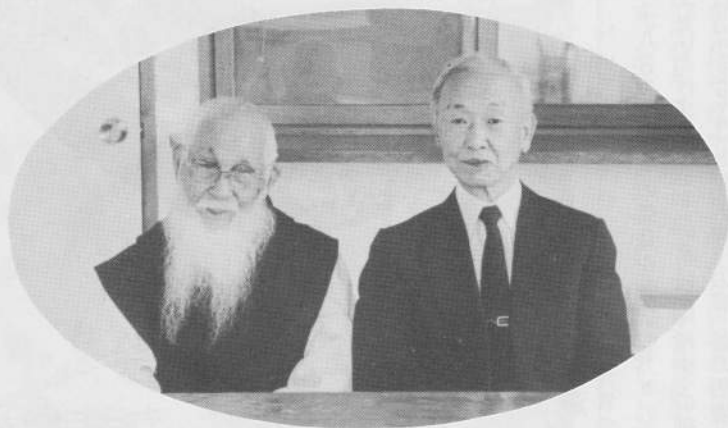
函館に住む弟から一通のファックスが届いた。読んでみると当別のトラピスト修道院に今村さんが今なお健在で、観光客の世話をし、慕われているという新聞記事であった。そう言えば私の生家が、大野町で小さな牧場を創業したのが昭和十年ころで、これらの牛はほとんど修道院から譲り受けたオランダ産の乳牛であった。そのため、この牛の飼育は修道院から直接指導を受けていた。このころ私どもの牛舎に来て親切に牛の分べんの処理方法から牛乳の搾り方まで教えてくれた方がこの今村さんでした。もうすでに六十年余も昔のことである。戦時中を通して音信が絶えてしまったので、健在とは思ってもよらなかった。

早速手紙を書いて七月十一日午前中に何うからと連絡し、当別の修道院を訪ねた。受付で確かめるまでもなく、笑顔で迎えた長くて白いあごひげの老人こそは、今村セバスチャン師その人であった。

「懐かしい人が見えるというので、今朝からお待ちしております」。

たくましい往年の面影はないが、優しいまなざしと静かなことば遣いは昔のままである。かみしめるような口調で懐旧談を聞かせてくれた。

「私が九州から志を抱いてこの修道院の門をたたいたのは、大正十五年二月十七日ですから、ここでちょうど七十年を過ごしたことになります。そのときは二十七歳でしたから、今年で九十八歳にな



今村セバスチャン師と相馬さん

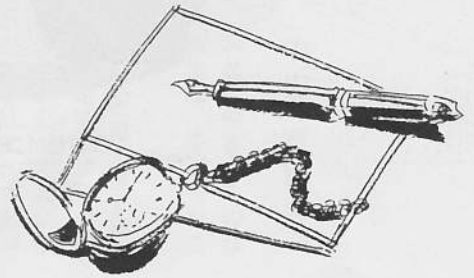
ります」と淡々としてトラピスト修道院生活の思い出を話される。記憶は正確で理路整然とした話しぶりは少しも年齢を感じさせない。「今村さんのトラピストで過ごされた生涯で、いちばん印象に残ることは何ですか」との私の問いに答えてこんな話をされた。

戦争の末期ころのある日、陸軍省の軍人（大佐）が見えて「トラピスト修道院は男子（当別）、女子（湯の川）ともに国が接収することになったので、撤収の準備をするように」と伝えられた。青天のへきれきで驚いたが、その理由はわからない。仄聞するところによれば、六百町歩もの土地を持ちながら食料の増産に協力もせず、日本人を過酷な農作業や森林の伐採の仕事で酷使しているということだそうです。

それからひと月後に五人の将校が接収のために修道院を訪れた。院の内外を案内したあとで、少しましな院内食を出してもてなした。みんなが食卓に着席したところで、引率の海軍大尉が立ち上がって、「皆さんの緊張した顔に憂愁がみなぎっているのがよくわかります。それで食事の前に伝えておきますが、トラピスト修道院の接収はただ今取り消しと決定します」と軍の決断としてはっきり宣言され、安心させてから食事に入ったそうです。列席の神父ならびに行者たちは耳を疑った。接収は覚悟の上だっただけに驚きと喜びが交錯し、一瞬安堵の雰囲気が漂った。

あとで知ったことであるが、これはそのとき院の内外を視察し、厳しい戒律の下に徹底した自給自足の生活をしている修道院の実情がわかったので、前に定めた接収の理由はまったく偏見と誤解に基づくものであると判断されたからであったと言う。

そのときの接収の責任者であった海軍大尉は鹿児島出身の四本某という方で、戦後も長く修道院と親しくつきあって頂いたが、もしこの四本氏以外の方が接収に来られたら、今日のトラピスト修道院は存在しなかったかもしれないと、今村師は万感を込めて語ってくれた。



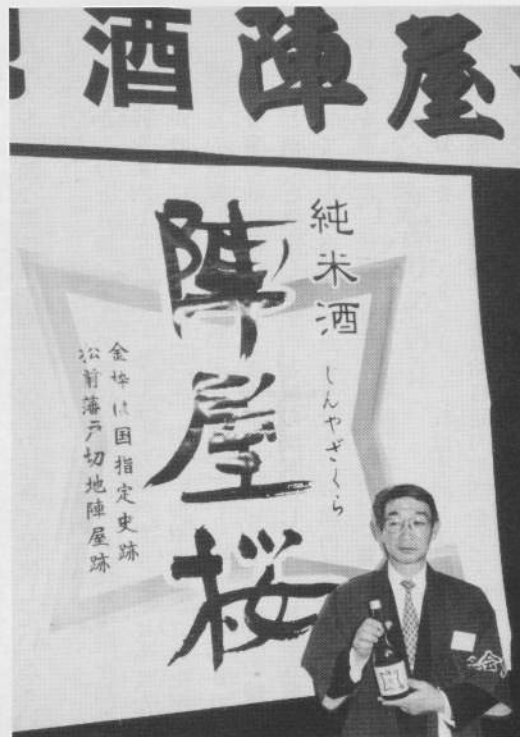
●

金澤 雄二

平成九年三月十八日、三か年の歳月を多数の方々のご支援を得てその産声を上磯町にあげました。その名は「陣屋桜」の純米酒です。

上磯産飯米「ほのか224」と戸切地川の源「釜の仙境の湧水」とで、日本酒度（甘辛の基準）（十）一・五というやや辛口の純粹な地酒がこの世を見ることができました。この産物を求めたことは、当町は全国的類を見ない大型店のひしめきで、小企業の窓口的存在から自活を求め、かつ都市化されつつある上磯町にも新しい産物をと考へ、酒屋の同業者が考へ出した一粒の結晶です。

特に、われわれ任意団体の努力に対し、関係機関が積極的にご支援くださったことはこのうえない喜びでした。町内外、マスコミ関係の方々も両手をあげてこの産物の誕生に祝福をいただいております。



上磯産地酒「陣屋桜」

これから、全国津々浦々に「陣屋桜」の旅鳥が飛び立っていくことと存じますので、いっそうのご愛顧をお願い申し上げます。私どももこの子にもっと磨きをかけて、「ふるさと」の味を満喫していただくと考えております。どうぞよろしく！

ちなみにこの「陣屋桜」は、上磯産ホツギ貝料理と格別な調和がとれているような気がいたします…。

（上磯酒の会 飯生二丁目在住）

●

新井田 優孝

昨年五月に東京在住の坂本東洋志君（三十六年度卒）に寄稿をお願いし、「東京上磯会」を町会に紹介しましたところ、多数の問い合わせがありました。諸先輩をはじめ皆様方には、それぞれの分野で活躍のことと心よりお喜び申し上げます。

今年も雪も少なく、例年のない早い桜観を迎えましたが、五月下旬より雨と山背風が続く寒い毎日、農作物や漁業への影響が心配されました。

六月一日に予定されていた町内小学校の運動会も雨のため中止となり、各PTAで開催日決定に苦慮されたようです。茂辺地小学校（宗山幸男会長・五十一年度卒）も八日に順延され、八十人の児童が寒い中を元気に頑張っていました。

今年、茂辺地小学校が開校百二十周年、茂辺地中学校が五十年を迎えます。中学校では十一月二十九日に記念行事を予定しており、佐々木斌（同窓会長・二十四年度卒）実行委員長のもと準備作業を進めております。故郷の「秋さけの味」を思い出してみませんか。「サーモン カム バック ミーノ」。（茂辺地町内会青少年部 部長）



わいわいがやがや さけまつり

中島 百子

六月のさわやかな日ざしがキラキラと輝いて、なんとなく深呼吸をしたくなるような季節になりました。上磯町にもすてきな建物・総合文化センター「愛称：かなでる」が整備を終え、七月十三日の落成記念式を待つばかりとなりました。

上磯町の文化の拠点・発信基地となる「かなでる」は、メインとなる大ホールはオーケストラボックスに広いステージ、ピアノはフルコンサート用のスタインウェイ等々、オーケストラをはじめ能、歌舞伎、オペラ、演劇などいろいろな催し物ができる機能を備えています。また、ステージは大小ホールどちらにも檜が張られていて、本物の「檜舞台」で演奏できる日を今から心待ちしております。

資料室、展示室、そして図書館には最終的に五万冊の本が入るようになります。

また、いよいよ町民主体による「上磯町かなでる協会」も六月二十五日に設立されました。よりよい芸術文化を町民の皆様に提供していく団体です。今はまだ何もかも手探りの状態ですが、皆様と力を合わせて実績を積んでいきますので、どうぞよろしく願います。

（上磯町文化団体連絡協議会 会長）

木野 義次

遠きにおいてふるさとを思い懐かしむ心情を察します。幾重の困難をクリアして平成七年二月二十五日発会式、同年十月七日に第一回総会を開催され、上磯会が発足されたこと、茂辺地出身の皆さんの情報として聞かされました。本当によかったです。

茂辺地出身のメンバー二十数名、東京で集い茂辺地小学校の応援

歌「茂辺地の海に鍛えたる」を合唱し、楽しいひとときを過ごしたことも聞きました。山の幸・海の幸に恵まれる上磯、茂辺地に生まれ育ち、小・中学校と恩師や同級生、同窓生、地域の皆さんに育まれ、慈しまれてふるさとを遠く離れておりますが、年輪を重ねることとふるさとへ思いをはせることでしよう。天満宮大祭や学校の運動会、町内のスポーツ大会など、思いは走馬灯のようによぎることでしょう。

東京で同郷の仲間たち、ふるさとの近況を知りたい気持、郷愁の一面かも……。茂辺地川は今もさけのさかのぼりが身近で観察でき、観光客も年々増加しています。十一月三日（文化の日）茂辺地川で「第十六回上磯町さけまつり」が開催されます。北海道旅行の機会がありましたら、ぜひご来町ください。

（茂辺地町内会 会長）

石崎 幸男

東京上磯会の皆様方におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

東京には学生時代のころから憧れを抱いていた一人として、上磯町のホットな情報を私からお知らせしたいと思えます。

昭和五十四年度から開始された国指定の史跡・松前藩戸切地陣屋跡の発掘調査・建物遺構の復元作業が昨年に終了しました。皆様方も同様であるかと思えますが、陣屋は小・中学校時代の思い出深い名所でございます。私も商工会青年部OB会では、これを機会に、このすばらしい観光資源を生かすべく、今年の五月十一日に「陣屋桜まつり」を企画し、開催したところでございます。祭りでは当別漁火太鼓をはじめ茂辺地さけまつり音頭、日本セメントふれあい音頭、上磯乱舞陣屋組によるよさこいソーラン踊りなどが会場を盛り上げ、花見客にも大いに喜んでいただけたものと思っております。



勇壮な 陣屋桜まつり

ます。

私どもは、春は「陣屋桜まつり」、夏は「上磯町夏まつり」、秋は「茂辺地さけまつり」、冬は「スノーランドかみいそ」として、この祭りを四大イベントの一つに定着させたいと考えております。

桜の咲く季節、ふるさと上磯町においてにえられる機会がございます。桜の咲く季節、ふるさと上磯町においてにえられる機会がございます。桜の咲く季節、ふるさと上磯町においてにえられる機会がございます。桜の咲く季節、ふるさと上磯町においてにえられる機会がございます。

（商工会青年部OB会 会長）

文 芸 交 流



上磯の自然と仲間たち

大滝 淳

上磯の山に向いて言うことなし

ふるさとの山は

ありがたきかな

人は郷里ふるさとの山は、ありがたきかな。と申されるが、それは、山の形を言っているのではなく、川、雲、木、海、波、人、ことば……。すべてを含めて山と表現しているのである。

北海道の上磯には、ふるさとの山がたくさん今も残っている。

ふるさとのことば

私の友人で、郷里を異常なほどに愛する御仁ごじんがいる。

彼は都会的で、江戸っ子より東京の酔いも甘いも知っていて、都

会生活に適応していると、人は彼を評する。

彼は、東京では東京のことばを使うが、電話の受話器を取った瞬間から、上磯の人よりさらに、なまりのある郷里のことばを使い始める。

「おれは、十二時三〇分の一三五の「T」で函館空港に降りるぞ！」

電話が鳴るので受話器を取ると、こちらを確かめないで一方的に用件を話す。ことばに前もない。あともない。ぶつきらぼうな電話である。

「よし、わかった！」。

こつちもなんてことはない。これですべてが理解し合えるのである。

このような郷里なまりと短絡的なことばの交流で心情までが通じ合うのであるから、郷里ことばはありがたい。

これらすべてが「郷里の山」である。上磯には、このような郷里がいたるところにある。美しい心情が今もきらびやかに光を放っているのである。

川と魚と遊び

友人が東京から里帰りして二、三日した日のことである。

「おい！川遊びをやるぞ！」。

五十年前の電話なら理解できるが、六十歳の老人間には、とっさに返答ができなかった。それでも、彼は善意の固まりなので、悪いことにはならんと思って答えた。

「おお！いいぞ！」。

ことばは短いほどいい。

集まる場所は、竹馬の少年期に遊んだ水無の川である。

仲間が集まった。

「よし。やるぞ！」。水温七〜八度の川へ入って魚を捕るのである。みんな五十の声が聞こえる年齢であるのに、川なんて何のその。

水の中に潜る者さえいる。

撫が仕掛けてあるので、魚を追い出しているのである。大きな雨
ますやイワナ、ヤマメが撫に入る。

オシヨロコマは天然記念物に指定されているのではないかと思っ
たが、この五十歳代の少年たちには天然記念物も、国宝もないので
ある。われわれにただあるのは、「ふるさとの山と川」だけである。
ふるさとの大自然こそが第一番の宝である。

(北海道微生物研究所 所長 上磯町久根別在住)

上磯俳壇七月例会作品

◎ 庶題 (鰻)

上磯俳壇例会の作品が北海道新聞発行のミニコミ紙
『かみいそかわら版』(毎月1回発行)に掲載され、
たいへん好評を博しております。
代表作を転載させていただきます。

うな重で 暑気を払い 覇気が湧く	東 浜 斉藤喜恵子	洪団扇 七輪持ち出し 鰻焼く	久根別 福士 慶女
風鈴や 鰻香りて 下駄の音	七重浜 奈良 満	鰻焼く 匂い泌みたる 暖簾かな	公園通 坂本 正
うな料理に 喉を鳴らせし 親子かな	飯 生 久保田道子	行き先を 告げず鰻の 海の旅	七重浜 釣谷せい子
鰻食う 互いに濡れいる 湖と空	昭 和 佐藤 晴峰	幟立て 蒲焼鰻 売場かな	飯 生 会津 多門
裏小路 出れば暖簾の 鰻の香	七重浜 安彦せつ子	食べたいと 鰻ひとくち 床に伏す	昭 和 岡田 和加
換気孔 鰻の匂い そここゝに	中野通 本間 北秀	鰻喰い 余生いくらか 伸びし感	七重浜 安彦 凍星
柴又の 二階へ上る 鰻かな	函 館 白井 雅女	うなぎ漁 気も合い引く手 夫婦舟	東 浜 清水えい子
天然の 鰻は天に ひねくれる	大工川 田中 風来	年金の 小さき箸り 土用丑	桔 梗 松原 藤吉
合掌の あと鰻静かに 喰われおり	函 館 長谷川みさを	路地ぬける 風鰻屋の 在り所	飯 生 大森三枝子
写楽にも 鰻捕ませ のれんゆる	昭 和 山田一桿子	屋台店 土用鰻の 焼く匂い	谷 好 小西 春風



日本セメント株式会社

上 磯 工 場

上磯町谷好1-151

TEL. 0138-73-2111(代)


それがファースの家。
がっちり逃がさない



太陽の熱
たっぷり取り込んで、

調湿のできる日本で初のオール電化住宅専用工法

フクチ・エアライトシステム(FAS)本部

工法開発元  福地建装 ●札幌支店 011-221-9023
●西東京営業所 0422-44-6901

本社/〒049-01 北海道上磯郡上磯町字中野通321

TEL 0138-73-5558 FAX 0138-73-8460

新時代の家づくり 安全と安らぎの住宅建築

一般建築設計施行

株式会社 小林建設

代表取締役 小林 法雄

上磯町追分4丁目10番2号

TEL. 0138-73-5597

FAX. 0138-73-6565

事務局だより

……役員紹介……

会 長	相馬正樹	幹 事	浅部敏彦	幹 事	佐藤金也
副会長	小田島二郎	"	嵐 良司	"	関谷幸子
"	郷内 繁	"	石塚美耶子	"	相馬 滋
事務局長	高橋昌三	"	加藤和子	"	染木トシ
会 計	宮崎紀夫	"	黒田 博	"	福原孝久
会計監査	平野富久子	"	小松二郎	"	福原和子
		"	坂本東洋志	"	藤田 幸
				"	山下勇吉

……東京上磯会 会員数……

	正会員	準会員	計
総 数	262	313	575
内 訳			
上 磯	133	132	316
谷 川	39		
峯 朗	8		
沖 川	4		
石 別	29	49	78
茂辺地	15	34	49
浜 分	34	98	132

◀ 小学校別
(H9. 9.10現在)



パルプ、一般建築材、原木売買、薪、シイタケボダ木
木炭製造・販売、しいたけ生産・販売、その他造林、造材一般

山下林業

■代表 山下 勇

〒049-01 上磯町桜岱166

TEL. 0138-73-7626

「東京上磯会」会則

1. 本会は「東京上磯会」と称し、事務所を _____ に置く。
2. 本会は東京都およびその近郊在住の北海道上磯町出身者ならびに縁故者をもって組織する。
3. 本会は会員相互の交流と親睦をはかり、併せて故郷の限りない発展に寄与する。
4. 本会は前項の目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1) 集会の開催
 - 2) 会報の発行
 - 3) 会員名簿の作成
 - 4) その他本会の目的達成に必要な行事
5. 本会に次の役員を置く。

会 長	1名
副会長	2名
事務局長	1名
会計監査	1名
会 計	1名
幹 事	若干名
6. 会長および副会長、会計監査は総会において選出し、事務局長、会計ならびに幹事は会長が委嘱する。
7. 役員の任期は2年とする。ただし再任を妨げない。
8. 集会は次の5種とする。
 - 1) 総 会
 - 2) 臨時総会
 - 3) 懇 親 会
 - 4) 役 員 会
 - 5) 幹 事 会
9. 総会は毎年1回開催し、予算の審議ならびに前年度の会務および決算報告を行い、併せて重要事項を審議する。
10. 本会の経費は会費および寄付金をもって充てる。会費は年2000円とする。但し80歳以上の会員は会費を免除する。
11. 本会の会計年度は9月1日から8月31日までとする。
12. 本会に入会せんとする者は、所定の申込書に入会金を添えて会長の承認を得るものとする。
13. 本会則は総会の決議により変更することができる。
14. 本会則は平成7年10月1日より実施する。

内科・外科・脳神経外科・老人デイ・ケア科

上磯町 海老沢 医院

院長 海老沢 健二 副院長 高階 美恵子 副院長 上野 一義

上磯郡上磯町飯生3丁目1番36号 TEL. 0138-73-2135(代)
TEL. 0138-73-2160(脳外)

生石灰、消石灰製造、セメント、アサノファイラー

アサノクリーンセット、碎石、砂、塩カル、重油S、アスファルト他販売

北海道石灰開発株式会社

〒049-01 上磯町谷好2丁目4-1

TEL. 0138-73-2038

FAX. 0138-73-4785

この詩らしきものは筆者が若い若いころに連絡船への愛着を込めて
創ってみたものです。ご笑覧あれ。

連絡船ノスタルジー

- | | |
|--|--|
| 1. 津軽の海峡は 春だった
静かな朝に 連絡船がでる
臥牛の山を あとに見て
かもめ行こうよ 沖遠く
すずらんの香は 秘めし恋
わが青春の ノスタルジー | 3. 津軽の海峡は 秋だった
海霧にかくれて 連絡船が出る
葛登支の灯も ぬれて浮く
誰がために泣く 霧笛よ
とじる臉を ふるわせて
わが青春の ノスタルジー |
| 2. 津軽の海峡は 夏だった
光りたたえて 連絡船が出る
あの娘の夢も 波止場まで
あかいテープよ いつきれる
はまなす咲けば 胸さわぐ
わが青春の ノスタルジー | 4. 津軽の海峡は 冬だった
吹雪をつけて 連絡船が出る
カンカン寺の 鐘とぎれ
あの人はいま どのあたり
せめてとどけよ 虎落笛
わが青春の ノスタルジー |

編
集
後
記

ふるさとを思う気持ちにも、若者と中高年者ではその感じ方がかなり違っているように見受けられる。

ふるさとを離れて三十〜五十年を経ている中高年者の時代の大多数の人は連絡船で津軽海峡を渡って郷関を出ている。特に、上磯の浜からいつも連絡船の姿を眺めて生活してきた者にとっては、それぞれに忘れられない風景であり、離れていても心のどこかにしまいこんでいる一幅の画でもある。

ドラが鳴り、テープが交わされ岸壁を静かに離れるとき、感情は高まりその極みに達する。いろいろなことを走馬灯のように思い出すであらう。

ともあれ、そんな思いとないまぜになつてふるさとがある。上磯が…。

今は違います。おおかたは空を飛び、日帰りさえ可能な指呼の間にあるように思う。

ふるすとは遠くにありではなく、隣近所のような気であり、気楽に往復できるようになった。

であれば、ふるさとへの思いも懐かしさも薄くなるのも致し方ない。若者はそんな感情であらうか。

東京上磯会への若者の参加が少ないのもそんなことが一因かもしれない。悩みの種です。

「若者よ、みんなてふるさとを語ろうではないか！」。

発刊に当たり、役場、町内の方、会員の皆様から頂いたたくさん
の投稿も誌面や編集の都合で全部を掲載できませんでした。一部割
愛したことをお礼とお詫びを申し上げます。今後より一層のご愛
顧をお願い申し上げます。

副会長

小田島 二郎



お願い

- A. 回答用葉書の連絡事項欄で、下記についてお答えください。
1. 希望する本会の行事
会員の親睦旅行、ふるさと訪問旅行、お花見、ハイキング、ゴルフその他サークル活動などの希望する行事。
 2. 会に対する要望事項
- B. 会報に投稿を希望される方や広告を掲載したい方は、原稿をお送りください。
1. 広告掲載料はB-5版1/4ページ5,000円程度を目安にしてあります。
 2. 原稿字数は800字位に纏めてください。

会員を紹介してください！

会の発展は会員数を増やす以外に道はありません。
会員の振り起こしに積極的な御協力をお願いします。

東京上磯会
会報
磯の香